

巻頭言

世代



総合科学部長
佐藤 正樹

日本ではとくに昔話の蒐集で知られるグリム兄弟
後も、そして今もなお「兄弟」の名称を冠して語られることが多い。

弟ヴィルヘルムのせがれヘルマンは『グリム童話集』序に、「ドイツではグリム兄弟の名を知らぬ者はない。子どもたへの愛にはぐくまれて大きくなる。兄弟のご親戚ですかと訊ねられることも幾たびかあったが、わたしはその息子であり甥であればこそ、質問者の親戚同然にもなったのである。わたしにとってこれにまさる誉れはあるま先に亡くなったのは弟のほうであった。一八五九年十二月のことであるから、兄弟畢生の大作『ドイツ語辞典』第二巻の刊行を見ることはかなわなかった。ちなみに一八五二年に配本の始まったこの辞典は、歴代言語学者

の心血を注いだ努力のすえに、また、たび重なる
九六一年、ついに三十二
なって結実した。

弟

コプはベルリン科学アカデミーの講堂で
「グイ・グリム追悼演説」を行った。
薄暗い講堂の窓から光を採り入れるかのような

かすれた

か 情

て弟の思い出を語ったのであった。

このなかで

の

す時間の意味を説いている。兄弟姉妹はなにか

か

に遊び、おとなになったら行動をともし、
ならんで食事を なら を

れが兄弟姉妹だ。これにたいして親子の間が
らではそうはいかない。「両親と子どもが生活
をともしするのは、たかだか人生の半分にす
ぎない。「息子は父の子ども時代も青春時代

すがたをもう身をもつて体験す

い。「親と子とはつまり「完全な同時代人ではな
い。両親の命は子どものそれよりも早く過去
のなかへ沈み、子の命はそのあとで、未来を
目指して立っている。」

これはだけ

だ

か老年を迎えたとき、わたしたちはそこに立
ち会うことを許されないのだという厳然たる

である。諸君はわたしたちの子ども時代も青
春時代も知らない。わたしたちに諸君の老年
を知るすべはない。まったく異なる人生の線
が、たまたま時 まで
にすぎないのである。

昔のひとはこれを、茶道の心構えになぞら
えて一期一会といい、またとない出会いの重
い意味を吟味した。

わたしたちは諸君に何を伝えられるだろ
う。何を伝えるべきであろう。総合科学部創
立三十周年記念シンポジウムにお招きし
説家、瀬名秀、

それを「思い」という平易なことばで語った。
「思いは残る」とも言っている。

わたしがこんなことをわざわざしたためる
のは、わたし自身が老年にさしかかり、諸君
に伝えるべき「思い」とはどのようなものか、
しかも諸君の心に「残る」メッセージを伝え
うるかということに、自分でも不思議なほど
こだわっているからだ。

い こ
そが「教育」の意味なのではないか。それが
手近な目標にすげかえられ、教育というもの
が見くびられているのではないか。そんな危

惧
かのグリムは『ドイツ語辞典』を書 は
め、ついにFの途中でその先を他人にゆだね
なければならなかった。わたしたちは諸君の
将来に立ち会うことはできない。しかし、そ
の未来に向けて語ることこ の

や、そもそも教育の本義ではないかと、わた
しは希望と暗澹たる気分とを二つながらもち
つつ沈思せざるをえな